

劉得仁論

松岡秀明

劉得仁は、晩唐期に生きた人である。その詩は、「全唐詩」に二卷。百三十八首。また「補遺」に五首。更に「全唐詩補逸」に一首の詩を、現在に残している。文章は残っていない。詩の数は決して多いとはいえない。

当時の評価として、例えば、唐末の張為の「詩人主客図」に、「清奇僻苦主」孟郊の「及門」にその名がある。中唐の苦吟派の孟郊に連なる詩人として、考えられている。⁽¹⁾

また、晩唐の詩論家として知られる司空図も、「与王駕評詩」(王駕に与えて詩を評す)という文の中で、その名を挙げて評価している。⁽²⁾

……。劉公夢得楊公巨源、亦各有勝會。浪仙無可劉得仁輩、時得佳致、亦足滌煩。……
……。劉公夢得 楊公巨源、亦各おの勝會有り。浪仙 無可 劉得仁の輩、時に佳致を得、亦滌煩たるに足る。……

賈島や無可と並んで評価されている。「滌煩」とは、煩らわしさを洗い流すという意であり、また「茶」を指す言葉でもあるようだ。その詩は、一服の清涼剤であるとしている。

南宋の「郡齋讀書志」卷十八に、

……。長慶中、以詩名。五言清瑩、独歩文場。……
……。長慶中、詩名を以てす。五言は清瑩にして、文場に独歩す。
……

とあるのは、それまでの評価、評判を集大成したかの感がある。「長慶」は、穆宗の年号で、八二一年から八二四年である。「五言」は五言律詩のこと。「清瑩」とは、きよらかに輝くさまで、「文場」とは、文壇、あるいは、科擧の試験場を指す。「文場に独歩」というのは、独自の地位を占めたという意であろうが、過褒の感がある。

一方、北宋初めの「北夢鎖言」巻六では、晩唐の人である薛能の逸話の中で、劉得仁の詩について、次のように語られている。

……。薛許州能、以詩道為己任。還劉得仁卷有詩云、百首如一首、卷初如卷終。……

……。薛許州能、詩道を以て己の任と為す。劉得仁の巻を還して詩有りて云く、百首は一首の如く、卷初は卷終の如しと。……

その詩巻、詩集は、初めから終りまで同じと手厳しい。つまり、千篇一律ということ、辛辣である。

以上、晩唐期から宋にかけて、評価の良し悪しはあるが、一応、その詩は読まれ、伝わっていたことは、確認できる。更に、晩唐期の著名な詩僧貫休に、

・読劉得仁賈島集二首

劉得仁と賈島の集を読む二首

という詩題の五律二首があるように、「集」として伝えられていた。

「新唐書藝文志」、「郡齋讀書志」、「直齋書録解題」なども、少ないながら、それぞれ一卷を著録する⁽³⁾。

そして、その後、長い年月の中で、歴史の彼方に埋もれていった。その詩も、例えば、わが国でよく読まれた「三体詩」に四首とられ⁽⁴⁾ているが、特に注目される存在でもない。また、今日、文学史の上で、名を載せるべき人でもない。特色ある詩を残しているわけ

もない。それも、また、確かなことである⁽⁵⁾。

このような評価の劉得仁が死んだ時、多くの人が哀悼の詩を書いたという。劉得仁の、最も古い伝記資料は、「唐摭言」巻十であるが、次のようである。

……。既終、詩人爭為詩以弔之。唯供奉僧棲白擅名。詩曰……
……。既に終りて、詩人争いて詩を為り以て之れを弔う。唯だ供奉僧棲白のみ名を擅にす。詩に曰く、……

「詩人」は「争って」哀悼の詩を詠じたというのである。最も有名なものが、僧棲白の詩であった。「詩に曰く」の省略部は、次のようである。

忍苦為詩身到此 忍苦 詩を為り 身此に到る
冰魂雪魄已難招 冰魂 雪魄 已に招き難し
直教桂子落墳上 直だ桂子をして墳上に落とせば
生得一枝冤始銷 一枝を生じ得て 冤始めて銷えん

忍え苦しみ詩を作り、死に到ったという。「氷のような魂」「雪のような魄」も、劉得仁の「魂」の形容である。汚れない清らかなものの比喩である。死者は称揚されるのが、常である。しかし、尋常でないのが、後の二句である。「桂」は、晋の郗詵の「桂林一枝」による、科擧に関する詩語で、常套の語である。「折桂」（桂を折る）⁽⁶⁾といえ、科擧の及第を指す。その「桂」の「子」（み、たね）が、

墓の上に落ちて、木が生えて、一本の枝が生じれば、「冤」がやつと消えるだろうという。つまり、科挙の落第の「冤」である。唐代の詩人で科挙に苦しんだ人は数多い。しかし、死後、このような綿綿とした、あるいは骨髄に徹するような「冤」を持って死んだといわれるのは特異であろう。その詩はどのようなものか。どのような人生であったのか。そもそも、「冤」とは、何によるのか。科挙に對しての日常や意識は、どのようであったのか。

本論は、その残された詩や諸資料、追懷や哀悼の詩などを通して、分析、考察をし、その人生を浮き彫りにし、唐代詩人の基底を探ろうとするものである。

二

そもそも、「科挙」は、高級官僚になるための試験であるが、唐代では、他に、父祖の恩蔭や皇帝の一族などの要件で、ポストを得るということもあった。劉得仁は、この科挙を受け続け、結局及第できず、「冤」を含んだまま死んでいったのである。では、劉得仁は、他の手段で官僚になるという可能性はなかったのであろうか。あったのである。自ら何度も、自負を籠めて表現している。自分は皇帝の縁戚である、一族であるということをする。

ここで、「唐摭言」の省略部分を、全て挙げれば、次のようである。

劉得仁、貴主之子。自開成至大中三朝、昆弟皆歷貴仕。而得仁苦

於詩、出入拳場三十年、竟無所成。嘗自述曰、外家雖是帝、当路且無親。……

劉得仁は、貴主の子。開成より大中に到る三朝、昆弟は皆貴仕を歴。而して得仁詩に苦しみ、拳場に出入すること三十年、竟に成す所無し。嘗て自ら述べて曰く、外家はれ帝と雖も、当路且く親無しと。……

この後の部分に、棲白の哀悼詩の部分が続くのだが、冒頭の「貴主」とは、皇帝の姉妹のことである。「外家」は、例えば、「唐詩紀事」卷五十三などでは、

外族帝王是 外族 帝王是れなり

中朝親故稀 中朝 親故稀なり

というように、「外族」という言葉になつている。「外家」「外族」も、細かく意義に分け入ると微妙な差があるが、「母親の実家」と解してよいであろう。それ故、「唐摭言」は、「貴主の子」という表現の根拠としている。これを、「直齋書録解題」卷十九や「唐才子傳」卷六などは、「公主之子」（公主の子）と言いかえているが、意味は同じである。

「開成」は、文宗の年号、八三六年～八四〇年。「大中」は宣宗の年号、八四七年～八六〇年。その間に、武宗の「会昌」、八四一年～八四六年が入る。「昆弟」は兄弟。「貴仕」は高いポストと考えてよい。しかし、この兄弟の名も役職も、全く分らず、「唐摭言」が

何を根拠としたのかも分らない。何かが伝聞としてあったのか、あるいは、「外家」「外族」という言葉からの、通念であろうか。この部分、非常に問題を含むが、劉得仁だけは、科挙というルートにこだわりの続けたのである。

更に、詩の中で、別の言葉で、皇帝との縁戚関係に言及している。

戚里称儒愧小才 戚里 儒と称せらるるも小才を愧ず

〔省試日上崔侍郎四首〕第三首の第一句

「戚里」という言葉は、「史記」万石張叔伝に出所をもち、女性が皇帝の方へ入る際、その実家の方を指す。いわゆる「外戚」である。

「貴主」が、皇帝の方から縁付いて来るとすれば、こちらは皇帝の方へ縁付くということで、方向が逆になり、くい違ってくるが、一般的に、広い意味で、皇帝の縁戚というように考えればよいであろう。「戚里」には、更に一例がある。

辛苦文場久 辛苦 文場に久しく

因縁戚里深 因縁 戚里に深し

〔陳情上李景讓大夫〕の第九、十句

「文場」とは、科挙の試験場。「文場」と対になるのが「戚里」である。血縁の世界である。そして、後の句に自注が残る。劉得仁は、わざわざ残したのである。

親弟大中元年尚主
親弟 大中元年 尚主

大中元年は八四七年。「尚主」とは、皇帝の娘と結婚することである。それ故、「因縁」が二重に「深」いのである。因みに、その詩句で、自己の兄弟に言及があるのは、これ以外にない。

この「戚里」という言葉は、劉得仁という人についての伝承とともに後に伝えられ、若い日の韋荘が、その墓を過った哀悼の詩にも現われる。

名有詩家業 名に詩家の業有り
身無戚里心 身に戚里の心無し

〔劉得仁墓〕の第三、四句

詩人としての名の他に、皇帝の一族ということも広く伝わっていた。後の句は、その身に皇帝に連なる一族という意識はないという。これは、自己の詩句と矛盾する。あるいは、「戚里」の出身にもかかわらず、科挙に挑んでいたことをいうのであろうか。劉得仁にとって、皇帝の縁者である、血筋であるということは、已に見たように、自負であった。プライドである。地方出身の、出自の低い、科挙受験者の一群とは、異質であったらう。しかし、科挙という制度は、血統のみでは動かず、下第という状況が続くのである。

何故、下第が続くのであろうか。劉得仁は、先の「唐撫言」の「自述」の中で、ネック、不利を嘆いている。自己は、皇帝に連な

る血筋であるが、「当路」、つまり、官の世界の要所、あるいは重職に、自分の「親」、親しい人、親戚が居ないということである。これは、「唐詩紀事」では、「中朝」（朝廷の中）に、「親故」が「稀」という表現となる。自己を引きあげてくれる人が居ないという嘆きである。

唐代の科挙の場合、もとより試験は行われ、学力は問題とされるが、更はその人物の全体的評価が加わり、総合的な判断が下される。人物の情報が、知貢挙に集まる。「推薦」により、人材の情報が集められる。受験者は、自己を認め、「援引」してくれる有力者を求める。高官に知己を求めて運動をするわけである。皇帝の一族でありながら、官僚機構の中に、有力者が居ないのである。手ずるが無いと嘆くのである。

劉得仁に次のような、五言排律二十句の詩がある。

・題従伯舍人道正里南園

「従伯」は父親のいとこ。「舍人」は「中書舍人」のこと。詔勅起草を担当する。「文士の極任」といわれる、名誉あるポストである。しかし、姓名の特定は難しい。⁽⁶⁾この人が、劉得仁にとっていかなる影響をもったのかも不明である。縁戚であるというだけで、「援引」ということでもなかったのか。あるいは、何らかの要因で、この人自身が力を失ったのか。この詩では、長々と「南園」の風趣と、主人の静雅な生活の描写が続いた後、最後の二句が、突然、次のよう

雲奔投刺者 雲奔 刺を投ずる者
日日待為霖 日日 霖と為るを待つ

雲のように奔る、刺を投ずる者とは、「援引」や「干謁」を願う者である。当然、科挙の受験者と考えてよい。毎日、「霖」、なが雨、つまり、恵みの雨、恩沢となるのを待っているという風景である。その一人が劉得仁であったとは、容易に想像しうる。

では、「貴仕」であった「昆弟」は、何なのだろうか。果して、「貴仕」になったのか。「唐摭言」の記述に、甚だ疑問が生ずるのである。仮に「貴仕」としても、影響力のあるものであったのか、果して「貴」（高級）であったのか。甚だ漠然とした記述である。

皇帝の一族としても、皇帝が変われば、血は薄く縁は遠くなる。スタッフである官僚群の勢力も変わる。長い受験歴の中で、有力者の人事模様も変化してゆくのは当然である。

劉得仁は、皇帝と科挙の関係を、次のように語る。

明主無私不是媒 明主は私無きも是れ媒ならず

（「省試日上崔侍郎四首」第三首の第四句）

皇帝は、公平無私の存在としても、自己、あるいは受験者を「援引」する人ではない。この「媒」となる人が、「中朝」の「親故」であり、「当路」の「親」である。及第にとっての足がかりなのである。「媒」（仲立ち）なのである。

たとえ、皇帝の血筋としても、科挙のシステムは、独自に回転し、公平性を維持しつつ、運用されていたと考えられる。それを理想として、目標として人材抜擢を行っていたと考えられる。絶えざる紛糾が起っても、それが科挙の本旨であつたらう。科挙の合否の枠組みの中で、皇帝の血縁ということは、数多くの受験者の中で、特に有利に働くということでもなかったのだ、と考えられる。科挙は、別なのである。一人の受験者にすぎない。

三

唐代の詩人の集には、時として、科挙の答案の詩が残されていることがある。劉得仁にも、「全唐詩」の順に詩題を挙げれば、次のような詩がある。

- ・ 監試蓮花峰
- ・ 京兆府試目極千里
- ・ 賦得聽松声
- ・ 鷺出谷

最初の詩は、国子監での試験のものである。国子監は、いわば国立学校であり、この「生徒」であることが、省試の受験資格でもあったが、唐代後期には主流ではなくなった。また、父祖の官品によって、入学資格やコースが決められたように、貴族主義的色彩を残すものであった。これは、劉得仁が、「貴王の子」、皇帝の血筋とい

う背景によるものであろう。劉得仁が「生徒」であつた「国子監」は、長安であると考えてよい。

「京兆府」は、長安を指し、長安で実施される地方試である。劉得仁が、前者のルートから、後者の地方試を経るルートに、いつ変わったのか、その理由は何か、もとより定かでないが、当時は、後者が主流であり、履歴上も敬意をもたれるものであつた。そして、出自が、「外家」「外族」であり、「戚里」という言葉もあつた。更に「監試」「京兆府試」の詩題から、本貫は、首都の長安であると判断してよい。そして、その生涯の生活圈、行動の範囲は、ほとんど長安を出ないのである。

およそ、唐代の詩人の人生を追う時、一つの都市や地域に定住して終るといふのは稀であろう。彼らは移動する。受験の為の上京。下第しての帰省。任官後の転勤、左遷、榮転。藩鎮の幕僚としての随行、赴任、転地。中央から地方へ、地方から地方。そして放浪。様々な人との出会いと別れ。地方の風物や自然との接触。旅の苦難など。そこに詩の誕生の契機が存在する。詩情の生起があり、唐詩の豊かさやダイナミズムの源泉がある。

しかし、劉得仁の詩を通観する時、この人自身が、長安から出て詠じた詩篇は、極めて少ない。逆に、明確に、長安での作と断定できるものが多いのが特色である。劉得仁は、長安から、ほとんど外に出たことがないのである。長安での、確実な地名の詩題を列挙する。

その住居は、朱雀街東の第三列の最も南の、「通濟坊」であり、五言律詩の

・夏日通濟里居酬諸先輩見訪

・通濟里居酬盧肇見尋不遇

が残されている。前者は、「諸先輩」が訪問した際の応酬の一篇。

後者は、「盧肇」という「長者」に訪問されたが、会えなかった為、更に応酬した一篇である。詩句の中で、自宅の描写を拾えば、前者の詩の第五、六句

門列晴峰色 門に列す 晴峰の色

堂開古木陰 堂は開く 古木の陰

後者の詩の第五、六句

雲山堪眺望 雲山 眺望に堪え

車馬必裴回 車馬 必ず裴回せん

と、長安城の最南端の坊であるためか、「晴峰」や「雲山」を詠ずる。「終南山」である。

更に別宅として、五言律詩の

・夏日樊川別業即事

の存在がある。「樊川」は、長安の南の郊外。「別業」とは別邸、別

宅である。第一句と第二句を引けば、

無事称無才 事無く才無きを称す

柴門亦罕開 柴門 亦開くこと罕なり

第七、八句は、これも終南山の遠望である。

終南雲漸合 終南 雲漸く合し

咫尺失崔嵬 咫尺にも崔嵬を失す

世俗を離れた、隱者のような生活の一場面と周辺の景物を詠じている。

長安の坊名が、直接、詩題にあるのは、已に挙げた、

・題従伯舍人道正里南園

である。「道正坊」は、街東の最も東の列で、興慶宮の南の坊である。

このような居所の位置から、当然、生活圏は近隣の坊里へ広がり、寺院なども散策地となる。例えば、日本の空海に縁の深い「青竜寺」は、最も東の「新昌坊」にあったが、

・青竜寺僧院

・秋晚与友人遊青竜寺

の二首が残る。「大唐西域記」の玄奘ゆかりの「慈恩寺」も、居所の「通濟坊」の北の「晋昌坊」にあったが、

・晩遊慈恩寺

・夏日遊慈恩寺

・慈恩寺塔下避暑

と、三首あり、避暑や僧との交遊が詠せられる。長安東南隅の園地「曲江」の南では、

・宿普濟寺

の長詩一篇がある。寺院では、「通濟坊」より遠いが、「靖善坊」の「興善寺」が

・冬日題興善寺崔律師院孤松

に、現われている。

「昇平坊」の「楽遊原」は、長安城内の最も高い所で、長安人士の遊興や登高の場であったが、

・楽遊原春望

の詩が残されており、著名な「曲江池」では、

・晩歩曲江因謁慈恩寺恭上人

・訪曲江胡処士

などの詩がある。

以上のように、劉得仁の詩においては、長安城内の坊里、著名な寺院、市民行楽の場が次々と出現する。長安城の東南隅に、その人生の、日常の中心があつたといえる。そこに限定されるが故の、詩の世界の狭さと交遊の限界があつたのではなからうか。

長安からやや離れた地名が一例ある。

・回中夜訪独孤従事

「回中」が地名である。⁽¹⁰⁾「独孤」は姓。もとより名は不明である。

「従事」は、節度使などの幕僚である。劉得仁は、この人を、「回中」で「夜」「訪」ねたのである。目的は分らない。「回中」は、秦の始皇帝の設けた宮殿の名から転じ、史記や漢書等の歴史書に見える地名である。古来、長安の西方、あるいは西北方の地名である事は、確かであるが、細部の小さい区域では、一定しない。ここでは、節度使の管轄という点から、鳳翔隴右節度使の治下の隴州、あるいは、涇原節度使の治下の涇州とならう。ただ前者において、会府は鳳翔府であるから、この詩の第三、四句

辺境時無事 辺境 時に事無く
州城夜訪君 州城 夜 君を訪ぬ

の「州城」からすれば、涇州の方がより妥当と思われるが、確かなことは不明である。いずれにせよ、「回中」は、今の陝西省と甘粛省との境界沿いの地域であり、広大な唐朝の領域からすれば、相対的に、京兆府の近傍と言つてもよいであろう。

では、最も遠い所は、どこであろうか。それは、唐代の越州、今の浙江省の紹興である。ここで詠ぜられた詩が三首残る。いずれも、五言律詩で、「全唐詩」の順に、詩題を挙げる。

- ・宣義池上
- ・宿宣義池亭
- ・雲門寺

二番めの詩は、「三体詩」にも選ばれているが、その第一、二句

暮色遶柯亭 暮色 柯亭を遶り
南山幽竹青 南山 幽竹青し

の「柯亭」が、漢の蔡邕の伝説を伴い、北宋の地誌「太平寰宇記」卷九十六越州に記載されるものである。「雲門寺」も、南宋の「方輿勝覽」卷六紹興府に「雲門寺」があり、同じく「輿地紀勝」卷十紹興府に「雲門山」が記載され、雲門寺に言及する詩句が引用され

る。確かに、この三首の詩は、越州での作と言つてよいであろう。

何の為に、この南方への旅があったのかは、明らかではない。時期的には、「宣義池上」の第三、四句

何必青山遠 何ぞ必らずしも青山遠からん
仍将白髮帰 仍お白髪を將て帰らん

あるいは、「雲門寺」の詩の第七、八句

寄寺欲経歳 寺に寄りて歳を経んと欲す
慚無親故書 慚ず 親故の書無きを

とあるように、晩年のことと考えてよいであろう。科挙に成す所無く、長安の肉親からも疎遠となり、南方の寺で一人暮している状況である。

劉得仁の生涯のほとんどは、長安であった。そして、最も遠くへの旅は、越州である。しかし、その途上での各地の詩はない。詩人の行動、唐代の文人一般の履歴からすれば、この移動の無さは、やはり珍しいであろう。そして、これが唐詩に見られる、題材や詩情の豊かさ、多様さの欠落につながり、詩人としての幅の広さや成長にとつての欠点となっているであろう。また、人間関係の閉塞という事態になる。長安での変化のない生活と絶えざる受験と下第は、のびやかな精神を磨滅させてゆくことになる。詩は、ささやかな身辺の叙情に終始してゆく。

四

科挙の受験者達は、自己の売り込みに、長安の街を東奔西走する。「行巻」を試みる。「刺」を投ずる。「干謁」を求める。自己を評価し、その存在の情報を、科挙関係者に上げてゆく為である。そして、自己の苦境を訴える詩篇を贈ることも、日常の活動である。

「陳情」の語を詩題にもつ詩が二つある。⁽¹³⁾

・陳情上知己

・陳情上李景讓大夫

いずれも、自己の下第と窮地を嘆き、どうかして力を得て及第したいという主旨のものである。

詩人としても名があり、官僚としても有力な姚合に贈った、やはり援引、推挙を願う一篇の詩は次のようである。姚合は、この時、門下省の諫議大夫であった。

上姚諫議 姚諫議に上る

高文与盛徳 高文と盛徳と

皆謂古無倫 皆謂う 古より倫無しと

聖代生才子 聖代 才子を生じ

明庭有諫臣 明庭に諫臣有り

このような場合、相手の才徳を称揚するのが、儀礼であり、挨拶である。齒の浮くような言葉での賞賛である。一つのパターンである。

已瞻竜袞近 已に瞻る 竜袞の近きを

漸向鳳池新 漸く向う 鳳池の新たなるに

却憶波濤郡 却って憶う 波濤の郡

來時鳥嶼春 來る時 鳥嶼の春

朝廷での様子と前任地への言及である。姚合の履歴と詩句から、こは杭州であろう。

名因詩句大 名は詩句に因り大に

家似布衣貧 家は布衣に似て貧し

曾暗投新軸 曾て暗に新軸を投ず

頻聞獎滯身 頻りに滯身を奨むるを聞く

詩人としての名声と質素な生活。科挙との関わりで言えば、かつて面識ない時に、人知れず、暗に、姚合に、新しい作品「新軸」を贈っていたと言う。「行巻」である。それは、あなたが、滞れる身、つまり下第者、受験者に、推薦の手をさしのべるのを頻りに聞いていたからであるという。

照吟清夕月 吟を照らす 清夕の月

送葉紫霞人 葉を送る 紫霞の人

終計依門館 終に門館に依るを計る

何疑不化鱗 何ぞ鱗を化さざるを疑わん

相手の風雅な生活を描写する。そして、最後に、本音を示す。あなたに頼り力を得たいと。そうならば、魚が竜と化するように、科挙及第も間違いないと。登竜門の故事である。

皇帝の血筋を引きながらも、卑屈とも言える言葉を連ねなければならぬ。「援引」が必要であるからである。已に見たように、「明朝」に「親故」がないのである。

では、姚合から劉得仁への詩は残っているであろうか。それは一つもない。散佚ということを考えて入れても、一般的に、数多くの受験者への返答の詩など残らないであろう。しかし、劉得仁において、注意しなければならぬのは、多くの人への贈詩は残っているものの、逆に、劉得仁への贈詩は、死後の哀悼を除いて、残っていないことである。長安の、限られた人的サークルの中で、出身の自負や皇帝へ連なる血筋という位置から、一人浮いていたと考えられないか。いわば、他の詩人や科挙受験者、あるいは、科挙を通過して官僚になった者たちとの交遊に、見えない壁のようなものがあったのではないか。

例えば、雍陶に四首の贈詩がある。「全唐詩」の順に挙げると、次のようである。

・贈雍陶博士

・寄雍陶先輩

・对月寄雍陶

・送雍陶侍御赴兗州裴尚書命

雍陶は大和八年（八三四年）の進士及第。「唐才子伝」巻七によれば、出身は、蜀の成都であり、「少貧」（少くして貧し）という記述もある。その後、乱による流浪の時期もある。このような出自、履歴の人と、長安城内で生れ育ち、履歴上、科挙下第以外、特に苦難を経たようなこともない人間とは、何か相容れないものがあつたであろう。生きていく空間が異なっていたのではないか。もとより雍陶からの返詩や贈詩は残っていない。因みに、「全唐詩」で、姚合は七卷、雍陶は一卷の詩が残る。

このような交遊の状況の中で、高官で推挙を期待できそうな人物として、「丁学士」が居た。一つの寄贈の詩は、次のようである。

山中舒懷寄上丁学士 山中舒懷 丁学士に寄せ上る

五字投精鑑 五字 精鑑に投じ

慚非大雅詞 大雅の詞に非ざるを慚ず

本求閑賜覽 本より閑に覽を賜うを求む

豈料便蒙知 豈に料らん 便ち知を蒙むるとは

詩を投じた所、自分を認め、知り合いになったと述べる。「豈に料らん」に、思いがけない意が出ている。

幽拙欣殊幸 幽拙 殊幸を欣び

提携更不疑 提携 更に疑わず

弱苗須雨長 弱苗 雨の長きを須ち

懶翼在風吹 懶翼 風の吹くに在り

「幽拙」も「弱苗」も「懶翼」も、全て自己の状況を現わしている。

「提携」は、手を差し伸べ助けること。「雨」は慈雨であり、「風」も翼を浮かせるもので、丁学士の力である。恩沢や力添えの依頼である。

礪鏃端楊葉 鏃を礪きて楊葉を端し

光門待桂枝 門を光かすは桂枝を待つ

計聞塵裏譽 計りて聞く 塵裏の誉れ

因和禁中詩 因りて和す 禁中の詩

「楊葉」も「桂枝」も、科挙及第に関わる常套の語である。あなたの力によって及第の方へ向えるというわけである。末句には、自注がある。「学士有禁中詩、早春會命和」(学士に禁中の詩有り、早春會ち和を命ぜらる)。この唱和した七言律詩は、「禁署早春晴望」の題のもので、儀礼的、莊重なものである。

そもそも、「丁学士」とは誰であろうか。丁居晦が、最も妥当である。丁居晦は、正史等に伝はないが、「学士」は「翰林学士」であり、「重修承旨学士壁記」に、その名がある。⁽¹⁶⁾ 中書舍人や御史中丞などの高官を歴任しているが、二度、翰林学士に充てられている。一度は、大和九年(八三五年)〜開成三年(八三八年)にかけて、

二度めは、開成四年(八三九年)〜開成五年(八四〇年)である。開成五年三月十三日、戸部侍郎知制誥となり、その三月二十三日、突然逝去してしまうのである。先の「山中」の詩は、いずれの時か決め難いが、しかし次の「哭翰林丁侍郎」(翰林の丁侍郎を哭す)は、明確に、開成五年の作品である。

相知出肺腑 相知 肺腑に出ず

非旧亦非親 旧に非ず 亦親に非ず

每見雲霄侶 毎に雲霄の侶を見るも

多揚鄙拙身 多く鄙拙の身を揚ぐ

「肺腑」は帝室の一族。しかし、「旧」(古いよしみ、つきあい)でもないし、「親」(親しい人、親族)でもなかった。やはりここでも、皇帝に連なる縁がからんでいることになる。自分は高貴の身でありながら、「鄙拙」(身分低く処生拙い)つまり、科挙下第者を「援引」するのに、力を尽したと述べている。因みに丁居晦は、長慶二年(八二二年)の進士である。

劉得仁も、この人に期待する所が大であつたらう。しかし、この関係も、死によって突然、途切れてしまった。遺族を哀れむこと頻りであるが、自己の前途も塞がれたかのようだ。十六句の詩の末尾は、次のように終る。

官清仍齒壯 官は清く 仍お齒は壯に

兒小復家貧 兒は小さく復た家貧し

惆悵天難問 惆悵 天 問い難く
空流涙滿巾 空しく流れ 涙巾を満たす

まだ壮年であった故人の、残された家族を思い、嘆き悲しむのである。頼みの綱も切れてしまったのである。なお、丁居晦への贈詩は、劉得仁のものしか残らず、丁居晦自身の詩も、省試の詩が一首残るのみである。

以上のように、皇帝の血筋というものは、それが年月を経て薄く弱くなるとしても、科挙受験者や文人との交遊の中で、心理的壁のようなものではなかったか。また、「中朝」に「親故」なき状況も続いたのであろう。最も希望の持てそうな人物、丁居晦との交流も、不運にもぶつりと終ってしまった。丁居晦への贈詩の量と内容は、劉得仁の思い入れを物語っているよう。そして、また、科挙に関して、振り出しに戻ってしまうのである。

五

ある年の下第の際の咏嘆の詩が一つ残されている。相当な打撃を受けての結果である。

何処訪岐路 何処に岐路を訪ねん
青雲但憶帰 青雲 但だ帰を憶う
風塵数年限 風塵 数年の限り
門館一生依 門館 一生依らん

外族帝王是 外族 帝王是れなり
中朝親旧稀 中朝 親旧稀なり
翻令浮議者 翻って浮議する者をして
不許九霄飛 九霄を飛ぶを許さず

この詩の、五言律詩としての来歴には、少し問題がある。「全唐詩」では、「上翰林丁学士」（翰林の丁学士に上る）という二十句の作品の第二首となっている。「丁学士」は、丁居晦としてよい。「全唐詩」は、「全唐詩稿本」を受け継いでいる。しかし、例えば、宋版の残る「文苑英華」卷二六〇では、二十句の「上翰林丁学士」から三首おいてこの詩が置かれ、詩題を「上丁学士」として、分離している。また、「唐音統籤」卷六二二も、単独の五律の「上丁学士」である。「全唐詩」で第一首の長詩は、丁学士の人徳と平生を美辞を連ねて賞賛するだけの詩である。言外に、自己の援引と交際を求める意が、当然透けて見える詩であるが、一方、この五律は、一転して激情に駆られ、自己の状況を嘆くものとなっている。「文苑英華」以来の、詩形の違いもあり、別の独立した詩と考えた方がよい。「全唐詩稿本」は、詩題の類似の為か、単純に連結してしまった。

次に問題なのは、長い間、後半部のみ伝わり、前半は「文苑英華」で初めて現われ、五律の形をなしていることである。後半四句は、例えば、「唐詩紀事」「郡齋讀書志」「唐才子伝」に、単独で引用される。恐らく、唐代より、劉得仁にまつわるエピソードとして、いつも付随してきたものであろう。

「全唐詩」は題注で「一本將後四句作下第吟絶句」（一本、後四句

を將て、下第吟絶句と作す」と記す。ある書物は、後半四句を独自の絶句という詩形の作品と見なしているという。これは、「下第吟」としてよい。「万首唐人絶句」は、しばしば杜撰さを指摘されるが、これも後半四句を独り歩きさせたものであろう。しかし、唐代からの伝承性の確かさは、後半四句である。

詩の一句、二句に、下第の失意の様が表出される。「岐路」は、これからゆくべき自己の道でもある。「風塵」は、科挙受験の労苦の世界のこと。「数年」からすれば、受験開始から間もない頃か。「門館」は、頼るべき丁学士の所。「中朝」に「親旧」の「稀」な状況で、丁学士のみが頼れる存在である。「浮議」は、根拠のない議論。「九霄に飛ぶ」は、科挙及第を言う。ある年の下第の要因が、肝心な内容は分らないが、「浮議」であると、考えたのである。下第や試験からの追放であれば、賈島や温庭筠などは、伝記資料からその理由がある程度わかる。しかし、劉得仁の場合、全く分らない。語るべきではない事かもしれない。当時、周知の事ではあるが、文字には定着できない類いかもしれない。哀悼の詩を捧げた、例えば僧の棲白も知っていたとも考えられる。当人にとって、身に覚えがないこと、事実と異なることであろう。それ故、強く内向してゆく生涯の「冤」は、そこにあつた。この事は、相当の衝撃を与えたものと思われる。激情の噴出は、劉得仁の詩の全体の、平穩な詩情を突き破るものである。委細の分らない、「浮議」によるこの「冤」の言葉を、自らも語り、人もまた語り継ぐのである。

六

科挙受験の途上において、折り折りの感慨を詩人達は詠ずる。劉得仁の場合、詩の主体が五言律詩ということもあり、激情的な詩表現は、それ程存在しない。もとより、「苦吟」に関わる詩句の存在はあるが、全体的に、切迫感のある詩句は少ない。淡々とした情感の中で、科挙に関する思いや状況を表現する。「援引」を求めての長詩等は、又、別であるが。

たとえば

莫説春闈事 説く莫かれ 春闈の事
清宵且共吟 清宵 且く共に吟ぜん

〔秋夜喜友人宿〕の第一、二句

「春闈」は「礼部試」。つまり科挙の最も中核的な試験で、人々はこれをめざす。その話はやめて、清らかな宵に、共に詩を吟じようという。友人との交わりの表現である。

無才堪世棄 無才 世の棄つるに堪う
有句向誰誇 句有れど誰に向いて誇らん

〔池上宿〕の第三、四句

「世に棄てられる」というのは、科挙の下第を言い、周囲の人から

孤立する自己を指していよう。長い下第の末の、縁者、朋友からの見離しであり、疎外である。

このように、苦みを伴いつつ表出される感情は、つぶやきの趣もつが、時として、激情が溢れ出てくる。科挙及第に対する悲痛な思いの連作四首がある。七言絶句で、詩題は、

・省試日上崔侍郎四首 省試の日 崔侍郎に上る 四首

「省試」は「礼部試」である。その「進士科」が目標である。省試は、毎年正月に行なわれる。その当日に、「崔侍郎」に贈った詩で、当然、及第を願う内容である。崔侍郎は誰か分らない。「侍郎」は、尚書省六部の副大臣。科挙に関するれば、自動的に礼部侍郎が知貢掾となるのが通例であるが、他職が一時兼務することもあり、断定できない。また、崔姓の知貢掾は、もとより多数おり、劉得仁の大体の人生と重ねても、結局は断定できない⁽¹⁷⁾。この四首連作は、諸事断定できないが、恐らくは知貢掾への、最後の思いの伝達である。わらにも縋るといふ思いである。

衣上年年淚血痕 衣上 年年 淚血の痕

只將懷抱訴乾坤 只だ懷抱を將て乾坤に訴えん

如今主聖臣賢日 如今 主は聖に臣は賢なる日

豈致人間一物冤 豈に人間一物の冤を致さん

第一首である。誇大な措辞を使う。「年年」に、時の長さを表出す

る。そして末句に「冤」が出現する。「浮議」によって、及第を阻

まれた、翌年頃の作であろうか。この「冤」は、同時代の大方の同情と理解であったろう。僧棲白の哀悼の詩句にも入っていた。再度、「唐撫言」から引けば、

直教桂子落墳上 直だ桂子をして墳上に落としめば

生得一枝冤始銷 一枝を生じ得て冤始めて銷えん

「冤」は、もともと「ぬれぎぬ」「無実の罪」などの意をもつ。それに伴う「うらみ」である。事実でない事によって、下第させられたうらみであろう。

後に、劉得仁の墓に詣でた韋莊も、

至公遺至芸 至公 至芸を遺す

終抱至冤沈 終に至冤を抱きて沈む

〔劉得仁墓〕第一、二句

と表現し、劉得仁のこの詩句、あるいは僧棲白の詩句を意識している⁽¹⁸⁾。

如病如癡二十秋 病の如く痴の如く二十秋

求名難得又離休 名を求むるも得難く又休み難し

回看骨肉須堪恥 骨肉を回看すれば 須らく恥ずるに堪う

一著麻衣便白頭 一たび麻衣を著して便ち白頭

已に二十年の受験である。「病い」のよう。「痴」のよう。業であるのか、魔に取り憑かれているのか。「求名」は及第をいう。受験を止めることも難しい。肉親を見渡せば、誠に大へんな恥である。「麻衣」は、科挙受験者の着る服で、一たび着てより白髪となつてしまったという嘆きである。長期下第は、やはり恥なのである。しかも、「わざわざ」受けて来たのである。劉得仁にとって、この時点で、官僚になるのは、已に第一義ではない。科挙に通るのが目的であり、それ以外に何も無い。及第すれば、己の人生の名分が立つのである。

戚里称儒愧小才 戚里 儒と称せらるるも小才を愧ず
 礼闈公道此時間 礼闈公道 此の時開く
 他人何事虚相指 他人 何事ぞ 虚しく相指す
 明主無私不是媒 明主 無私なるも 是れ媒ならず

「戚里」で「儒者」と称されたという自負。「礼闈」は、礼部試のこと。「公道」とは、公平な人材選択、公平な合否ということ。第三句は解し難い。劉得仁を、皇帝に連なる人物と「指さす」。それは「虚しい」こと。それは「明主」（皇帝）が公平無私としても、科挙及第の「媒」（仲立ち）とはならないからだという主旨であろう。「媒」は「媒酌」であり、仲介者で、科挙に関わる常套語である。自己を「援引」「推薦」し、科挙関係者に、情報を送り、影響を与える人である。皇帝の血筋であることと、科挙の自律的システ

ムとは、一線を画すのである。皇帝の血筋に利があるわけではないとこの一句は言っている。

方寸終朝似火然 方寸 終朝 火の然ゆるに似たり
 為求白日上青天 白日を求め青天に上る為なり
 自嗟辜負平生眼 自ら嗟す 平生の眼に辜負するを
 不識春光二十年 春光を識らず 二十年

「方寸」は、心あるいは心臓。「終朝」は早朝。第二句は、科挙の及第の比喩的表現。「辜負」は、そむくこと。「春光を識らず」とは、科挙の下第をいう。ここでも「二十年」をくり返す。唐代において、そう長くはない寿命の中で、二十年の年月は重い。本人にとつても、一つの節目であり、ここでけりをつけたい、仮に下第としても、転ずる方向を考えたいという思いの年であつたらう。この四首の激しい感情は、他に例を見ない。詩風の基調を破っている。その背後には「二十年」という年月がある。仮に二十歳で始めたとしても、已に四十歳。已に壮年といつてよい。その時間の堆積の圧力と、「戚里」の視線の圧力と、下第の虚しさ、定まらない人生、様々な思いの飽和が極まったと考えられ、この詩の嘆きと訴えに凝縮したのであろう。しかし、もちろん、及第は果たせないのである。

七

なぜ、劉得仁は、科挙にこだわり続けたのであろうか。科挙は、

本来、高級官僚になるための試験であった。それが本末転倒して、及第のみが目的化してしまうのは、長期下第者に、往々見られる所である。しかし、劉得仁の場合、「唐摭言」の記述に信を置けば、「昆弟皆貴仕」（昆弟は皆貴仕）というように、ポストを得ていることになる。この表現の根拠は分らないが、唐五代の人にとって、皇帝の一族は「貴仕」につけるといのが、通念としてあったのであろう。「唐才子伝」では、更に言葉を費して

……。昆弟以貴戚皆擢顯仕。……

……。昆弟 貴戚を以て 皆 顯仕に擢んでらる。……

と述べている。更に、続けて説明、解釈を加えている。

得仁独苦工文。嘗立志必不獲科第、不願僮人之爵也。……

得仁独り工文に苦しむ。嘗て志を立て必ず科第を獲らざれば、人の爵を僮うを願わざるなりと。……

孟子の、いわゆる「人爵」「天爵」である。「人爵」、天子の与える爵位や名誉である。科擧に通らなければ、官僚ポストにつかないと決めたと言う。辛文房は、そう解している。

劉得仁が、皇帝の血筋であることは、自己の矜持とアイデンティティーであった。詩句で言及する所であった。しかし、同じく共存するもう一つの矜持がある。それは、再度、詩句を引くが、

戚里称儒愧小才 戚里 儒と称せらるるも小才を愧ず

〔省試日上崔侍郎四首〕第三首の第一句

「戚里」の中で「儒者」と称されることの喜びであり自負なのである。他の人とは異なるという自意識である。「小才を愧ず」は、常套表現であるが、裏には、逆に、自己の才に対する自負を見てよい。また、韋莊の詩句を、再度、引用すれば、

名有詩家業 名に詩家の業有り

身無戚里心 身に戚里の心無し

〔劉得仁墓〕の第三、四句

求めていたのは、「詩家」としての名声である。その延長上に、科擧及第の名声の追求がある。韋莊のこの詩句では、対句の中で否定されているが、皇帝の血族である自負と「儒者」であり、「詩家」である自負である。そして、後者の自負や自尊心は肥大化し、「戚里」「外家」の中に納まりきれない、安住できない自己があったと考えられる。「詩家」や「儒」の矜持に、つき動かされ、科擧に向うのではないか。

科擧をめざす多くの詩人の詩表現にある、生活の困窮の嘆きや、貧しさの訴えなどが、それがたとえ詩表現上のポーズとしても、劉得仁の詩には、ほとんど無い。自己の「貧」についての使用は、次の一例だけである。

老迷新道路 老いて迷う 新道路

貧売田園林 貧にして売る 田園林

〔陳情上李景讓大夫〕の第十一、十二句

さらっと、二十八句の長詩の中で述べる。長安には自邸、郊外に「別業」もあった。また多くの詩人に見られる、藩鎮の幕僚としての経歴や求職の形跡もない。ほとんど長安を出たこともなかった。官僚としての俸禄や特権が、必要であったのであろうか。劉得仁にとって、切望のものであったのだろうか。ここで、あえて極論すれば、劉得仁には、始めから、官僚などなる気は無かったのではないか。あるいは、当初より、科挙及第という「名」の追求だけだったのではないだろうか。

しかし、自己を引き立てる人、「援引」する人がいなかった。「中朝」の「親故」の不在を嘆いていた。逆に、出自の違いも一つの要因となって、交遊や干謁に、見えない壁が存していた。人間関係の構築に限りがあった。そして「浮議」による下第の嘆きがあった。

「冤」は、深く内に刻み込まれた。長期による下第は、肉親からの恥辱の包囲となる。詩中に、肉親の話題は、ほとんどない。越州での詩句では、便りの無さを嘆く。劉得仁は、孤立していったのではないか。「戚里」「外家」の中で、「儒」「詩家」と賞賛された自負は、科挙下第の中で、及第そののみが自己目的化してゆかざるを得ない。劉得仁は、ある時点で、己の人生を振り返って、次のように言う。また、及第への望みを持って活動している内容の詩の、冒頭の二句である。

一被浮名誤 一たび浮名に誤まれたれ
旋遭白髮侵 旋ち白髮の侵すに遭う

〔陳情上李景讓大夫〕

「浮名」は虚名。自分の実体の無い名声。それによって、人生を誤ったという。そして早くも老いてしまったという。どこかで、悟ったのだが、人生の方向を変えられないのである。もとより、生活苦などはない。苦悩は下第である。次第に、「戚里」「外家」の中の、浮いた存在となろう。「詩人」としては、当時は、名を知られていないとしても、後代に残るものでもない。儒者としての盛名があるわけではない。科挙及第の榮譽があるわけではない。まして、官歴もない。首都長安の中で、狭い交遊の中での、中途半端な位置の、「高等遊民」でしかなかったのだ。「唐才子伝」は、その人生、詩作の態度を美辞を連ねて述べた後、

…… 王孫公子中、千載求一人不可得也。……
…… 王孫公子の中、千載に一人を求むるも得べからず。……

と、絶賛するのであるが。劉得仁には、科挙に及第するほか、自己実現が無かったのである。たとえ、道を誤まったと気づいても、他の生き様がなかったのである。そして、結局、何ものにもなれなかったのである。

劉得仁は、恐らく南方で、旅の途上、死んだ。正確な場所は、も

とより分らない。「客死」である。

懷劉得仁 劉得仁を懷う

詩名動帝畿 詩名 帝畿を動かす

身謝亦因詩 身謝るも亦詩に因る

白日只如哭 白日 只だ哭くが如く

皇天得不知 皇天 知らざるを得んや

旅墳孤躡岳 旅墳 孤にして岳に躡き

羸僕泣如兒 羸僕 泣きて兒の如し

多少求名者 多少の名を求むる者

聞之淚尽垂 之れを聞きて涙尽く垂れん

詩僧貫休の追懷の詩である。第一、二句は誇張であるが、死者への哀悼である。しかし、死の原因が、「詩」であるというのは、意味深い。詩に因って、身を誤ったとも読める。知名度はあったようだが、長期下第は、それ自体で名が広まるであろう。第三、四句も誇大な表現である。太陽も哭く。天もその死を知ろうという。第五、六句は、「旅墳」とあり、「客死」したのである。旅の途上の死である。越州からの途次か、その近辺でのことか。「孤」に、その死のわびしさが写される。「躡」は、解し難い。対句を無視すれば、「躡岳」という、土地の山か。第六句は、実見か伝聞か分らないが、墓の側で、あるいは死体の側で、「羸僕」（やせこけた召使い）が子供のように泣いているという景である。死を見とったのは、この従者だけかもしれない。貫休は、越州の隣、婺州の人であり、この地方

に、その最後の状況が広まっていた可能性がある。七句、八句の、「名を求むる者」とは、詩名でもよいが、科挙及第の名声である。この人の末路を聞いて、皆、涙を流すであろうという。何ものにもなりえなかった、また何もなさなかった人の、「詩人」のわびしい最後である。ほとんど長安で人生を送った劉得仁が、旅の途上で死ぬもいうのも、また皮肉なことであった。「病の如く」科挙に囚われた人の最後である。

註

- (1) 丁福保「歷代詩話統編」による。以下、伝記等の諸資料は、通行する排印本による。煩を避け、出版社、出版年等はいちいち注記しない。
- (2) 「司空表聖文集」卷一（四部叢刊本）。同書では、劉得仁の「得」が「徳」となっている。「得」としてよい。時として、諸資料中、「徳」の字の場合があるが、伝写の誤りとしてよい。
- (3) 本論での、詩や詩題の引用は、劉得仁のものとはより、全て「全唐詩」（中華書局排印本）による。
- (4) 李建崑「中晚唐苦吟詩人研究」では、姚合系苦吟詩人の一人として、とりあげられている。
- (5) 胡震亨「唐音癸籤」卷八。「……天子甥為一名終日哀吟、何自苦。」
- (6) 陶敏「全唐詩人名考証」は、劉瑒とするが、確証はない。
- (7) 康駢「劇談錄」「……自大中咸通之後、每歲試春官者、千余人。其間章句有聞、臺臺不絶。……皆苦心文華、厄於一第。……」この中に劉得仁の名もある。「学津討源」による。

- (8) 第三首まで、陸倕然他「唐代応試詩注訳」に注解があり、第三首を除く三首の分析や鑑賞が、鄭曉霞「唐代科挙詩研究」にある。
- (9) 「唐兩京城坊考」卷三通濟坊には、この二篇の詩題を引く。なお、本論中の坊名は、同書による。
- (10) 晩唐期の詩人、李商隱に「回中牡丹……」温庭筠に「回中作」がある。諸注釈、細部で一定しない。
- (11) 「全唐詩補逸」に「涇川野居晚望」があり、長安北郊と考えてよいだろう。
- (12) 村上哲見「三体詩」では、「越中の僧」棲白との関係に言及する。「晩年」と推定する。
- (13) この二詩の分析は、拙論「唐代の陳情の詩について」（東京経済大学人文自然科学論集第一二〇号）
- (14) 姚合に「送崔之仁」という詩があり、「全唐詩」は「一作別劉得仁」と題に注する。この詩の内容、姚合の他の崔之仁に寄せた詩の検討から、劉得仁とは関わらない。
- (15) 「全唐詩」題注「一本題上有奉和翰林丁侍郎七字」
- (16) 「翰苑群書」（知不足齋叢書所収）による。また岑仲勉「翰林學士壁記注補」による。
- (17) 傅璇琮主編「唐五代文學編年史」は、知貢舉の工部侍郎崔暉とし、大和九年（八三五年）の作とするが、確証はない。なお、同書は、十三条に、劉得仁の詩の編年があるが、約半数は、推定である。
- (18) 杜荀鶴「哭劉得仁」の尾連「多応銜恨骨、千古不為塵」に「恨」がある。劉得仁への哀悼の詩は、本論にあげるものとこれら全てである。